

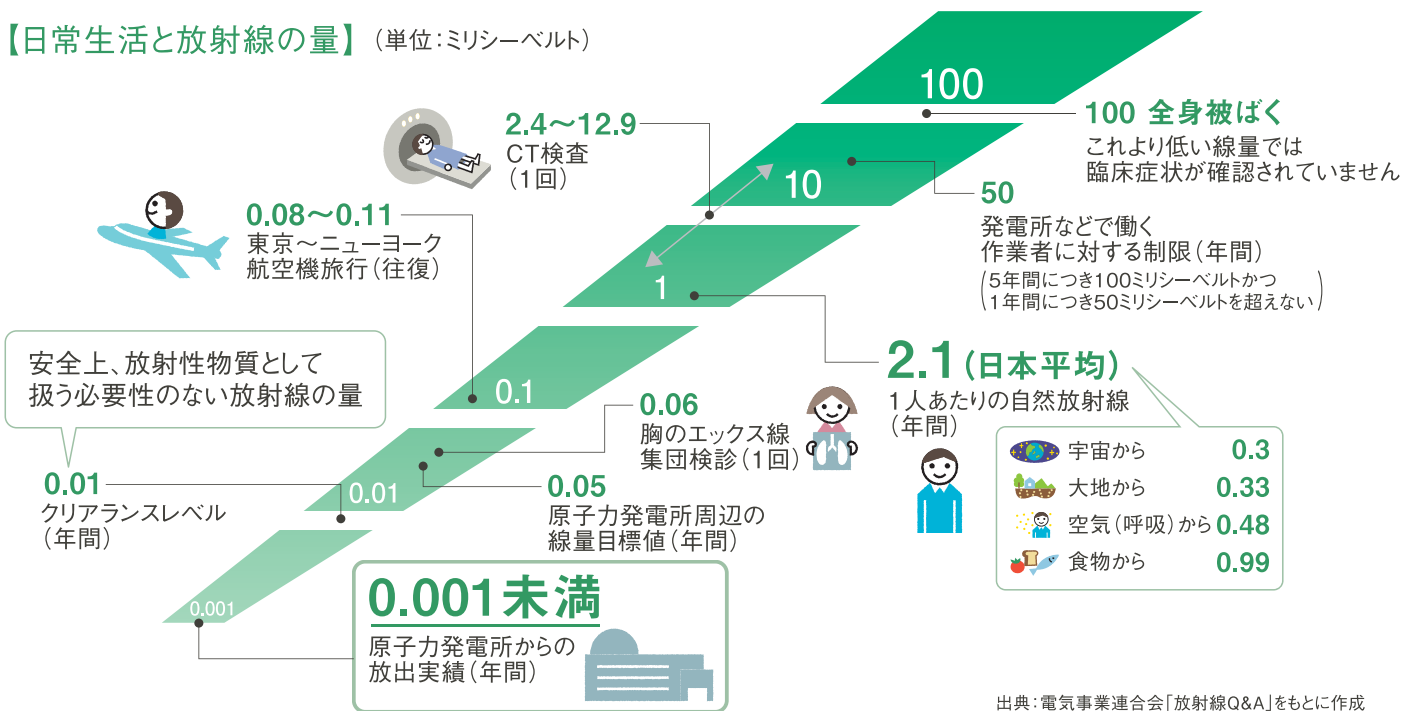
安全・安心の  
追求

# 原子力発電所では、発電所周辺での放射線量の管理を徹底しています

原子力発電所から放出される年間の放射線量は、自然界から受ける放射線量の

## 2,000分の1以下です。

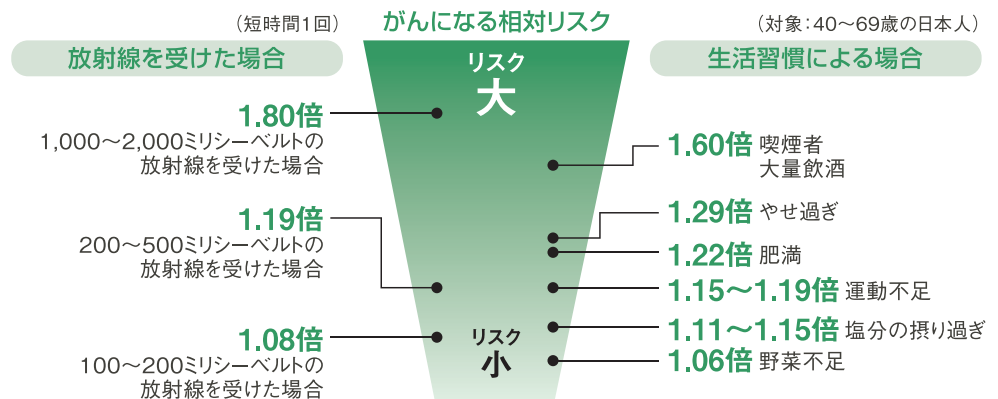
【日常生活と放射線の量】 (単位:ミリシーベルト)



## ■ がんになるリスクの比較 (放射線量と生活習慣)

放射線の被ばく線量が100～200ミリシーベルトあたりから、被ばく線量の増加に従い、発がんするリスクが増えます。

100ミリシーベルト以下では、放射線による発がんリスクの明らかな増加を証明することが難しい、ということが国際的な認識です。



出典:(独)国立がん研究センター調べ、政府関係省庁「放射線リスクに関する基礎的情報」をもとに作成  
(注)広島、長崎の原爆による瞬間的な被ばくを分析したデータ(固形がんのみ)であり、長期にわたる被ばくの影響を観察したものではない

?

使い終わった燃料は、どうなるの?

詳しくはウラ面へ

使い終わった燃料は、再処理して、  
ウランやプルトニウムを取り出し、燃料として利用することにしています。  
その過程で発生する高レベル放射性廃棄物は、何重ものバリアを施し、  
地下深い地層に安全に処分されることになっています。

## 放射性物質を閉じ込める多重のバリア

日本では、再処理の過程で生じる高レベル放射性廃液を、とがしたガラスと混ぜ合わせて安定した形態にして、地下300m以上の深い地層に処分することを基本方針としており、国際的にも、最も有望な方法として、諸外国で取組みが進められています。

2017年7月、地層処分の実現への第一歩として、国は、地層処分の仕組みや日本の地質環境等について国民の理解を深めていくために、「科学的特性マップ」を提示しました。国と原子力発電環境整備機構（NUMO）は、「科学的特性マップ」の提示をきっかけに、全国各地できめ細やかな対話活動を丁寧に進めていくこととしています。

当社としても、廃棄物の発生者としての責任を担う立場から、地域の皆さまの疑問や不安の声にお応えできるよう、国やNUMOとも連携を図りながら、理解活動に積極的に取り組んでいきます。

